

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

【授業担当者】

所属/職名: 農学部/准教授

氏 名: 岡本 繁久

授業科目名	国際バイテク・リーダー育成
研修先 (大学・国・都市名)	モンクット王工科大学トンブリ校(タイ王国・バンコク)
研修期間	令和 5年 2月 13日 ~ 令和 5年 2月 24日
<p>〔研修の目的・概要〕</p> <p>本研修の目的は、修士学生に対して、バイオテクノロジー(以下、バイテクと略す)と関係が深い産業界、例えば、農業生産法人、食品業界、農産物や加工食品等の輸出入に係る国際貿易界でリーダーとして活躍するための素養と指導力を身につけさせることである。このため、農業大国であり、農産物の加工が盛んで、且つそれらの産物を輸出することで外貨を獲得してきたタイ王国に短期滞在して、これに関するバイテク技術や、食の安全を確保するための国際規格・認証(GAPやHACCP等)、国際慣習などを学ばせる。現地活動は、ホスト校(KMUTT)教員による講義と、座学を補完するための農園(農場)、食品工場、国立食品研究所などへの視察訪問からなる。上記に加えて、KMUTT学生と派遣学生との間で、問題解決型学習(PBL; Problem-Based Learning)などの学生交流活動を行うことで、英語を用いたコミュニケーション力の向上と両国の若人同士の人脈形成を促す。また、世界遺産や寺院、美術館、ローカルマーケットなどを訪問視察することでタイの歴史文化・生活習慣を学ばせる。さらに、同時帯同する学部学生の指導補助や引率教員と学部学生とのパイプ役を担わせることで指導力を養う。</p>	
<p>〔研修の成果〕 * 事前・事後学習も含む。研修の目的や学習成果の達成状況について、また地域のグローバル化や活性化に資する人材育成の観点からの成果についても記載して下さい。</p> <p>今年度は、農林水産学専攻の1名の修士学生をKMUTTに派遣した。バイテク講義を受講するとともに、ココナッツ農園、ラン農園、味の素・アユタヤ工場、食品加工工場、国立食品研究所などを視察した。これらの活動を通じて熱帯・亜熱帯地域における農業や食品産業の問題点や、問題解決のためのバイテクの実践的利用例を学ぶことができた。学生交流の主要活動の一つとしてKMUTT国際コース学生と行った問題解決型学習(Problem-Based Learning, PBL)では、「日タイ二国間貿易を促進するための方策」というテーマの下、両校の学生がそれぞれの国の問題点を提示し、解決策を模索した。最後に派遣学生が、纏めた結果を両校教員とKMUTT学生の前で口頭発表した。KMUTT学生から数多くの質問が出たことから、今年のPBLは成功裡に終わったと考えられた。また、カルチャートリップとして、幾つかの寺院やチャクリ王朝について学べるラタナコーシン展示館、アユタヤ市内にある世界遺産・歴史記念公園などを訪れた。これらの訪問視察を通じて、タイ王国の成り立ちや王室と国民との関係性、タイと日本との長い交流史などを学んだ。ローカルマーケットでは現地の食材や食料加工品を実際に目の当たりにすることで現地の食文化について理解を深めるとともに、買い物を通じて市井の人々との会話と交流を図り、英語が通じなくても意志疎通が図れることを学んだ。東南アジアの大都市バンコクを実際に肌で感じた経験や、KMUTT学生をはじめとするタイ人やその他外国人と行ったコミュニケーションは、海外で或いは地域で活躍できるバイテク・リーダーを目指す派遣学生にとり貴重な財産になったと考えられる。活動の全体を通して修士学生には同時開講科目で派遣された学部生のリーダー役を務めてもらった。事前・事後学習の日程調整や教員との交渉、PBLでの意見集約やKMUTT学生との交渉、教員による指導の補助などではリーダーとしてどう振る舞うべきか、また要求される資質は何か、などに気がついたと思われる。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>今年度派遣した修士学生はバイテクに馴染みの薄い分野の学生であったため、専門知識も関連技術用語の語彙も不足しており、内容理解に苦労している場面が多かったように見受けられた。次年度は、バイテク関連の基礎知識を一定程度備えた修士学生をリクルートすることや、参加学生を早期に確定させ、事前学習を充実させるなどの工夫が必要と考えられる。また、KMUTTの学生のように、英語力が十分でなくとも、抵抗なく会話しようとする積極性も身につけさせたい。このために、より上級の英語関連資格の取得を求めたり、グローバルセンター開講の語学プログラム受講を推奨するなど、英会話能力の向上に向けて派遣前から十分な時間を割いて自ら取り組んでもらう仕組みを考えたい。</p>	